

研究成果 3,000 字程度 (別紙添付可)	研究の目的 石垣島しらほサンゴ村では2011年から継続的に、白保集落の子供たちを対象とした環境教育と地域のライフスタイルの調査を行ってきた。2018年度はこれらの活動を継続するとともに、私立海星小学校を現場として、普遍的な形での環境教育の展開を試みた。 石垣島には大学がないため、いわゆる大学生の年代と子供達の交流がほとんどない。白保ではそうした背景もあり、学生と子供達の交流をメインとした毎年の授業実践を地域から期待されている。また、2018年度は、私立海星小学校において、盛口ゼミの学生が環境教育の実践を行った。2019年度は、より一般的な教育の実践を試みるべく、喜屋武ゼミの学生が、国語・算数等の一般教科の授業実践を試みる。このような実践の試みを通じて、大学のない離島地域において、大学がどのような教育的関わりを行いえるかを実証する。 1) 白保さんご村における環境教育の実践 4 月より石垣島をテーマにした授業準備を盛口ゼミ 3 年次で行ってきた。今年のテーマは、虫（ヤドカリ）、砂、パイナップルの 3 つとなった。 ① NPO夏花との準備 白保のNPO夏花と沖縄大学盛口ゼミ及び共同研究班の協働で行われている「やまぐうキャンプ」が2019年で9回を迎えた。本年度はNPO夏花のメンバーが全て変わったため、これまでの引き継ぎ、今後の運営方針などの打ち合わせなどを含め、半年間かけ準備を行った。 ② やまぐうキャンプの実施 9月に台風17号が来たため、予定していた日程では石垣島にわたることができず、キャンプは、9月から10月に延期となった。10月13日、14日にやまぐうキャンプを実施。白保集落の子供達15名（小中学生、高校生）が参加し、授業を受け、大学生たちとの交流を楽しんだ。 ③ やまぐうキャンプを振り返って 今年度で9回目を迎えたやまぐうキャンプ（WWFしらサンゴ村のこどもクラブの一環として実施）を、白保集落の子供達は毎年、心待ちする様になっている。離島では大学生の年代が島を離れることが多いため、子供達はこの年代の学生たちとの交流が貴重な時間となる。今回も2年目から参加していた現高校生がリピーターとして参加し、自ら大学生のサポーターとして活躍していた。キャンプの間は当時の楽しかった思い出を語り、以前のキャンプが自分にどのように影響を与えたかを語っていた。。また、これまで大学生との交流がなかった中学生が、今回のキャンプを通して初めて「大学に行ってみたい」とその進路について考えるきっかけになった。 2) 私立海星小学校における授業の実施 昨年度に引き続き、私立海星小学校において国語と算数の交流授業を行った。授業に関しては喜屋武ゼミの学生が授業を行い、実施した。 ①授業の概要（*添付資料あり） 国語：「じゅげむ」対象：小学校2年生 古典落語の「じゅげむ」を教材に言葉の持つ音や響きの面白さを感じてもらう。実際に何度も口に出し、言葉にすることにより自分自身の名前の由来や響きについて気づく機会とする。 算数：「よみとる算数 ごみの焼却」対象：小学校4年生 「ごみのしょうきゃく工場見学」の日記から解決に必要な情報を読み取り演算を行って行く。自力解決の後はグループワークを行うことにより全員で授業の内容を理解する。
--	--

②交流の授業の実施

2020年2月27日に海星小学校との交流授業を行う。授業に関しては喜屋武ゼミの3年生の学生が担当する。また、前日の26日は石垣私立木本小学校において児童による小学校案内とこま作りを行う。

3) 離島地域における大学の関わる授業の創出と実践

昨今、教育現場では、先生たちの負担が大きくなりなかなか教科外の授業や、指導要領の内容を超えた授業実践を実施できない現状がある。また、こうした特別授業には予算がつくこともなく、外からの持ち込み授業が唯一の機会となっている学校現場も多い。昨年度の海星小学校の授業もフィールド授業を提案したが予算上の関係で実施することは叶わなかった。一方、大学では教員養成の学生はいるものの、授業の実践は教育実習に限られていることも多い。こうした背景からも、教育実習とは異なる現場で授業を実践し、その成果を他の学生とわかちあうことは、学生にとっては貴重な機会となり、また授業を受ける子供達にとっても日常では得られない知的な刺激を得る場となることが考えられる。また、大学のない離島地域において、大学と地域の教育現場が結びつく実践を開発することは、離島を抱える沖縄県に立地する大学として、地域貢献に直接的に結びつく研究活動であると考えられる。

今年度は2011年から続く白保サンゴ村での活動に加え、私立海星小学校での交流授業も昨年に引き続き実施することができた。

離島では大学生に出会う機会も少ないため、石垣島白保集落では、毎年沖縄大学の学生がキャンプや授業でやってくるのを心待ちするようになっている（通年活動であるしらほこどもクラブには、「やまんぐうキャンプがあるから」と参加する子供達がほとんどという状態になっている）。また、今年は初めて参加した中学生児童が、大学生と交流することで自らの進路の範囲内に大学を考え始めたという一場面もあった。さらに以前は参加者だった児童が自らサポーターとして関わるという一場面もあった。白保では、キャンプに関わったメンバーが積極的に外部の講座で講師を務めるようになるなど、集落内でも積極的な人材育成が続けられている。やまんぐうキャンプはそうした白保の流れの中でも大人から子供へとダイレクトに交流する機会となってきた。

2月には、やまんぐうキャンプとその後の本島内で行われた授業の実績を盛口ゼミの学生が「サンゴ礁保全推進協議会」のシンポジウムで発表を行った。実際に発表を行い質問を受けることで学生たち自身も自分たちの実践をより客観的に受け止める貴重な機会となった（シンポジウムでは、これまでの継続的な実践と今後教員になる学生たちがダイレクトに子供達に自然やサンゴのことを学ぶ機会の提供について大きな評価が得られていた）。教員養成課程にある学生が、授業から実際の現場に出て行くことは、大変貴重な機会である。準備中にはわからなかったこと、実際に子供達が求めていること（交流）、そうしたことを実際に感じる機会がある中でその後のモチベーションも変化してくる。今後もさらに大学生と地域の子供達が交流する機会を作っていきたいと考える。

3) その後の活動

盛口ゼミでは11月3日の沖大祭の「沖大付属小中」では、キャンプ時の砂の授業を低学年向けに改変して授業実践を行った。また、11月10日は沖縄こどもの国のイベントを学生が受注し、キャンプ時のパイナップルの授業を機のみ全般の内容に改変し、さらにワークショップ的要素を加えた授業を2種類用意し、実践を行った。さらに12月1日には学校NPO珊瑚舎スコーレの山ガンマリというイベントを学生が受注し、キャンプ時の砂およびパイナップルの授業の内容の一部を取り入れ、あらたなワークショップの内容を加えた実践を行った。以上のように、やまんぐうキャンプでの授業実践を軸として、学生たちは多様な授業実践を組み立て、体験する活動を行った。

